



高名なお坊さん(その11)

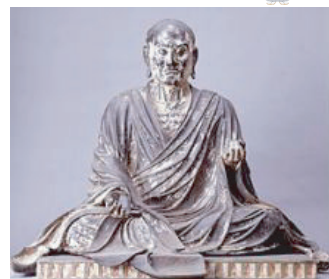
行基 奈良時代の僧侶

行基は天智天皇即位の668年和泉国大鳥郡蜂田郷（現・堺市西区家原寺町の辺り）で生まれました。父方の高志（こし）氏は百済系（渡来人）の豪族、母方の蜂田氏は中臣（なかとみ）系の豪族でした。

行基は15歳の時に出家し、法相宗飛鳥寺の高僧・道昭について修行しました。38歳の時から各地を巡り民間布教に努めました。その一方、土木技術を習得した行基は、彼を慕い集まった庶民と共に、苦しんでいる人々を救うため、ため池や農耕かんがい施設を造りました。ため池、用水路に始まる土木工事は、さらに堀川、波止場、橋、道路へと拡大していきました。

大阪府内には行基が造ったとされる「ため池」が、狭山池（大阪狭山市）、久米田池（岸和田市）、鶴田池（堺市）など数多く残されており、これら施設は時代を超えて地域住民に恩恵を与え続けています。

行基は749年、大勢の民衆に惜しまれつつ、82歳の生涯を閉じましたが、行基が築いた業績は人々に語り継がれ、今でも行基菩薩として慕われています。



行基坐像



行基菩薩行状絵伝



東大寺の行基堂



資料）画像提供（公財）元興寺文化財研究所

「元興寺極楽坊縁起絵巻」上巻「行基架橋」場面



護持会報恩講の法要中



法要の中休み中

報恩講は、勤まるのが当たり前、当然勤めるもの、という価値観を継承していくのは難しい時代なのでしょう。親鸞聖人様に申し訳なく思います。

時代の変化だからと諦めず、今と同じような思いを持つ方を増やしていけるよう、私は抗ってみますね。



有り難いことに、現在では、報恩講を家の仏壇で勤めるのは、一年に一度の大切な年中行事の一つに考えて頂けている方が多いのですが、今後、世代が代わって三十年、五十年先には、今とは異なった考えの方が多くなっているように思います。

十二月二日に勤めます善教寺報恩講の前に、護持会報恩講を勤めますので、前半戦のハイライトといった感じです。

一昔前は、報恩講は各家のお祭りの如く、親鸞聖人の法事を盛大に勤められていました。しかし今では、「報恩講って何？」「勤めんといけんの？」と、時々聞かれます。

住職レター

十月二十二日、護持会報恩講を勤めました。通常の法要開催を願っておりましたが、お斎（法要料理）接待するのは時期尚早との判断で、朝席のみお勤めしました。

この時期、報恩講シーズン真っ盛りです。善教寺では、秋の彼岸頃から、各門徒宅へ参勤し、その後は各地区（講中）でのお寄り講を勤めます。